

五島瑛智子先生—追悼の言葉

こばやし いん てつ
小林 寅 喆
Intetsu KOBAYASHI

平成 27 年 8 月 13 日、東京は日常の喧騒が和らいでいるお盆の最中、その訃報を聞くことになります。とうとうこの時が来てしまったのか…と、小生は茫然自失の状態になりました。

五島瑛智子先生が築いてこられた中国との交流の一環である中国看護協会が主催する災害看護学会で講演を終え、帰国した羽田空港で留守電を聴いたのがその 2 日前でした。五島先生の容体が急変したとの伝言でした。訪中の前、入院されている先生に、行ってきますとお伝えした際、先生の愛弟子である中国看護協会の理事長の李秀華さんによるしくね、と元気な声でおっしゃっていたことを鮮明に記憶しています。帰国翌日の 8 月 11 日にお見舞いに伺った時は意識も弱く呼吸が荒い状態に、何をどうすればよいのかわからず、ただおろおろするばかりでした。正直、またいつもの快活な口調で元気出しなさい、と励まされるのではないかとわずかな期待をいただいていたがその願いは叶いませんでした。

五島先生は昭和 25 年に東邦女子医学専門学校を卒業され、東京通信病院でのインターンを経て、昭和 26 年より東京大学伝染病研究所にて細菌学の研究に従事されて以来、一貫して細菌学・感染症学の研究者として日本の抗菌化学療法・感染症学の道を切り開いてこられたお一人です。小生が、五島先生が主任教授でおられた東邦大学医学部微生物学教室の門戸をたたいたのは 30 数年前で、その当時日本は抗菌薬開発で世界をリードする立場にありました。

その中でも五島先生の教室は日本を代表する抗菌薬の開発研究に関する基礎研究室で、多くの研究生が切磋琢磨していました。当時、抗菌化学療法・感染症の研究分野ではその勢いから学会場で、臨床から基礎の大御所の先生方による激しい討論が交わされている中で先生は、毅然とした態度で高尚な理論を展開されていました。その筋の通った強さと、一方で女性である物腰柔らかさから多くの先生方に親しまれていました。優れた研究者であるとともに、先生の幅広く奥深い知性と教養そして人間性が周りを引き付けていたのだと思います。先生の抗菌化学療法・感染症分野における多大な功績は本誌読者をはじめとする多くの方々が知るところでありますので、それ以外の先生のご活躍について思い出とともに触れさせていただきます。

先生は、東邦大学医学部微生物学教室の運営に携わる一方で、将来の医療・福祉における看護教育の重要性について早くから認識され、昭和 52 年には現在の東邦大学看護学部の前身である東邦大学看護専門学校の校長を務め、昭和 60 年には医療短期大学として改組し初代の学長に就任されます。当時は学内での看護教育に疑問視する意見が大多数の中で、五島先生の孤軍奮闘によって大学にされたことをお聞きしていました。先生は医療人において、いかに教養教育が重要であるかを常に強調されていました。看護師にも大学で教養教育が必要であるとの目論見は、その後日本全体にも浸透し、東邦大学医療

短期大学が開学した当時 10 校程度しかなかった看護系大学は、現在ではおよそ 250 校にまでおよんでいます。先生のゆるぎない信念に計り知れない先見性があったこと恐れ入るしだいです。その先見性は海外にまで目をお向けになり、昭和 62 年から中国との交流において、看護の高等教育の支援に力を注がれ、何十人もの研修生が先生のもと東邦大学で学び、今やそれぞれが中国の各地で看護におけるリーダーとして活躍しています。先にも触れましたが、その中の一人が現在の中華護理学会(中国看護協会)の理事長で全土約 300 万人余りの頂点に立つ李秀華さんです。この度の訃報に、中国各地で活躍されている先生の姉弟さんたちは大きな悲しみにうちひしがれていました。李秀華理事長は先生の容体が悪化した翌日には、公務をすべてキャンセルし先生の病床へ駆けつけて、そのまま滞在され葬儀までご参列くださいました。先生の教えは中国の看護に広く行きわたり、かの教え子たちは今でも先生を真の恩師として慕い続けています。その証として、先生が亡くなられた翌月には李秀華理事長をはじめ現在の中

国における看護の要人の多くの方々の思いをよせた追悼誌「永遠の想い—中日看護事業の友好大使 五島瑳智子先生」(全 65 頁 写真)が発刊されました。この一冊から先生が将来を見据え取り組まれた熱意によって、どれだけ中国の現代看護の発展に貢献されたか改めて認識するとともに、そのバイタリティにひたすら敬服する次第です。

さらに先生は自身が尊敬されていました東邦女子医専の先人たちによって取り組んでこられました障がい者支援事業として、重症心身障がい児・者施設の東京小児療育病院・みどり愛育園の支援を引き継がれ昭和 46 年には同施設の社会福祉法人鶴風会の理事に就任され、幅広く積極的に支援をしてこられました。平成 16 年には同法人の理事長に就任され、平成 22 年までの 6 年間にわたり日本の政治・経済が不安定な大変厳しい環境の中、人一倍強い責任感と行動力で次々に難題を解決され、平成 27 年には無事 50 周年を迎えることができました。その間、多くの障がい児・者の人たちが救われてきました。いつしか、先生は障がい者支援法の改正(改悪?)に

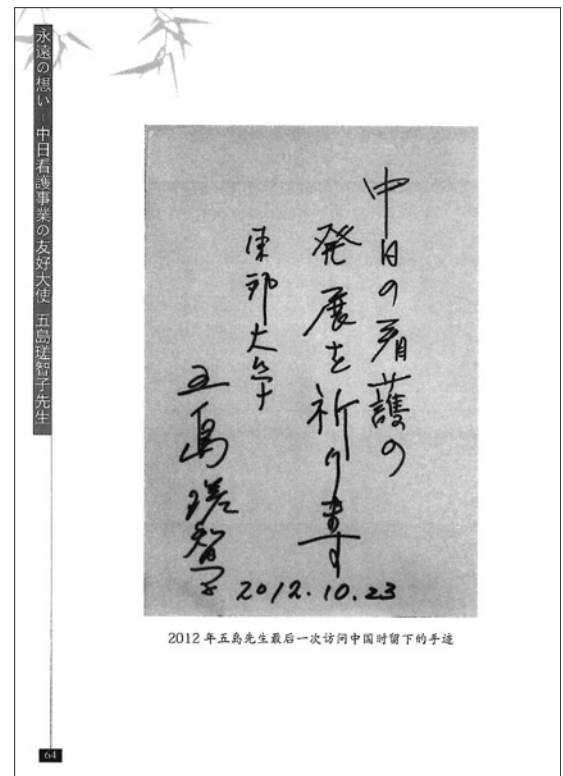
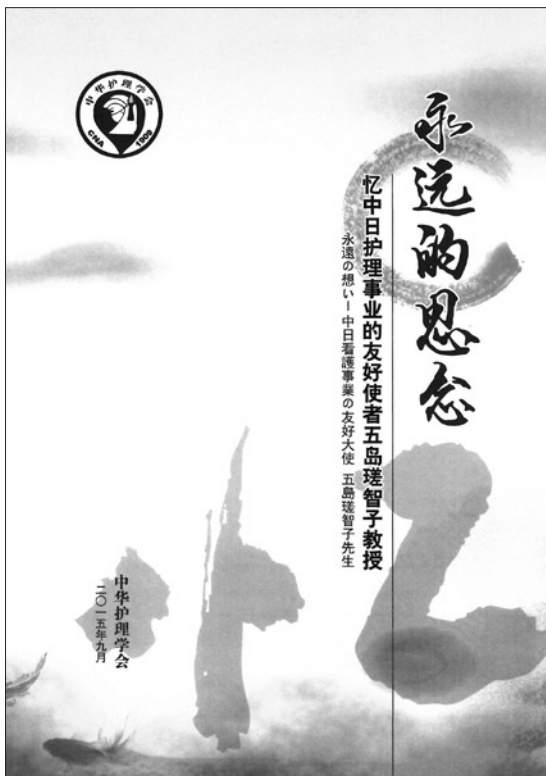


写真 「永遠の想い—中日看護事業の友好大使 五島瑳智子先生」

より、当該施設の運営が危ぶまれる状況に陥った際、先生自ら奔走し、体を壊しながらも関係者からの支援をお願いされていたことを憶えています。先生はいつも正しいと思ったことには、どのような困難にも毅然と立ち向かい、最後まで信念を貫かれる強い気持ちと、弱い者、特に子供たちへの優しい思いを持ち合わせたマザーテレサのような存在でした。いつも先生は、世界にはいまだ、教育も受けられず、十分な食事すらもとれない子供たちが多くいることを忘れてはならないと話しておられました。特に、最近日本で起こっている子供たちへの育児放棄（何も食べるものがなく餓死した事件）や度々報じられる幼児虐待についてわが子を思うように震えお怒りになっていました。先生は、子供たち若い人たちへの基礎教育の大切さを強く謳っていらっしゃいました。“基礎がないところには上物は立たない”と、偽装建築（姉齒事件）の例を挙げて、力説されていました。医療人である前に人間であること、親である前に人間であること、を口ぐせのようにおっしゃっていたことは、今の社会問題を象徴するお言葉であったと心打たれる次第です。

先生が唱えられた東邦大学の教育理念のひとつで

あります知性と教養に関し、カリキュラムを通して学生に様々な機会を与えてくださいました。先生は“今すぐにわからなくても良い”“自己の成長の糧にするかどうかは、その人次第”と、それぞれの個を尊重し、長い目で人を育てる豊かな人間愛にあふれていました。

最後になりますが、先生からの印象深いお言葉の中で、burnout syndrome（燃え尽き症候群）はそもそも人間として生きる目標がないから起こるのよ、とおっしゃっていましたことに姿勢が正されました。まさに先生が生きてこられた87年の証であり、その晩年、短い年月でしたが少しでも先生と共有した時間を過ごせた私たちは、なんと恵まれていたのかと今になってつくづく感じる次第です。あとは、お任せくださいとはおこがましくて申すことはできませんが、先生の教えをうけた者の一人として、少しでも世の中に役に立てるよう生きていく所存です。もう、その引き付ける魅力と毅然とした振舞いを見ることができないのは非常に残念でありませんが、先生から賜りました多くの教えと思い出に心から感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

平成28年2月15日